

編 集 後 記

今月号は原著5篇、症例報告16篇、臨床経験1篇の編成となった。以前から指摘されていることではあるが、原著論文数は減少し、その分、症例報告が増えている。症例報告も貴重な経験を報告するのであるから、大いに参考になるし、その疾患に対する知識を整理すると言う点から有意義であろう。ただ、多数例を比較検討し、現象の本質を見極めるべく推考に推考を重ねた原著論文の投稿が減少していることは残念なことである。英文論文の数が業績の数として評価される昨今、英文誌への投稿が増加するのは理解できるし、結果的に邦文誌への投稿が減少するのはやむを得ない。我が国は、とくに消化器外科領域においては先進的立場にあるのであるから、優秀な論文が広く海外に発表され世界をリードしていくことは日本の医学会として喜ぶべきであろう。ただ、学会の機関誌としての立場からすれば、少なくとも当学会総会で発表された優れた研究発表は原著形式として本誌に投稿されることを切望する。さて、本誌の編集委員会は三人の査読者が各論文を査読して評価し、それを編集委員全体でまた評価するというシステムが取られている。各論文はかなり深く吟味され、著者と編集委員会との間でのやり取りも何回も行われることが少なくない。私は医局員の協力を得て引用文献までチェックしているが、文献の記載が正確ではないことが多く、これにはうんざりする。実際その文献を参考とはせず、孫引きしていることが想像されるからである。その論文の質を疑うことにもなりかねない。きわめて大事なことであるが、統計学的解析に対する理解が足りない著者が多い。コンピューターが普及した現在、統計ソフトを用いればいとも簡単に統計計算はできるが単変量解析、多変量解析の意義や統計学的有意差が得られなかった現象の評価が正確に行なわれていない論文が多いように思える。また、日本語の特徴でもあるが文章の曖昧さはないようにしたいものである。私自身、他人の文章を評価できるようなセンスがあるとは思わないが、中には一体主語が何であるか、述語と連動していないものがある。科学論文は文学ではないにしても、自然現象を客観的に表現すると同時に、自己表現の場でもある。自己主張を正確に表現し、他の人にわかりやすく伝える必要がある。「文は人なり」とも言われ、文章にはその人の思想、全人格が反映、表現されるという。私は本誌編集委員としてはまだ1年半の経験であるが、査読を通して自省の念とともに正確な文章を書く習慣をつけたいものであると痛感している。

(鶴丸昌彦)